

洛西からの一読

今回のテーマは「成長」

成長とは…。

新たなステージに進むための武器であり、そして挑戦することを忘れないこと。



『グラデーション』 永井 するみ／著 光文社

日々の暮らしの中で、大きな変化もなく当たり前の生活を繰り返すありふれた毎日。そこにも小さな変化があり、変化は確実に人を成長させている。

この物語は、ひとりの少女が社会人になる23歳までの姿を描いている。

桂 真紀14歳中学2年生。特別目立つわけでもなく地味で人見知りをする少女がある日、女子たちが憧れている先輩の男子から誘われ一緒に帰ることに…。しかし真紀の心は一向に晴れず、断ることもできず憂鬱な気分で毎日を過ごすことになってしまう。そして真紀には、ずっと心の底に沈めている傷があり、

それが母との距離や物事と向き合う時に必ず浮かび上がり心を悩ませてしまう。家族という絶対的な信頼感があるからこそ、深く残る傷を生む事になるのかもしれない。真紀が年齢を重ねるごとに経験する恋愛感情、家族や仕事にかかわる人間関係などの揺れる感情描写が見事に表現されており、心情が丁寧に描かれている。真紀の不器用さをもどかしく感じてしまう場面もあるが、確実に一步一步と踏み出している姿は少しずつ色を重ねていくようで頼もしい。その色は穏やかで、やさしい光を放つ予感を残し物語は終わっている。

少女がどう成長していくのか、読者の世代で受け止め方が違ってくる一冊かもしれない。



『よろこびの歌』 宮下 奈都／著 実業之日本社

新設された私立明泉女子高等学校に通う七人の生徒たち。

明るく元気に接しているクラスメートのひとり一人が、コンプレックスを抱えながら学校生活を過ごしている。有名なヴァイオリニストを母にもつ御木元 玲は、声楽家をめざし受かかると思っていた音大付属の受験に失敗した。歌から離れ普通科のあるこの高校に入学したが、2年生になってもクラスメートとの交わりをかたくなに拒み、心を閉ざしていた。秋になると毎年行われる校内の合唱コンクールをきっかけに、玲と同級生たちに変化が起きる。デコボコした彼女たちの心を動かし響いたものは何だったのか…。

それぞれが、今にも吹き出しそうな不満や憤りのベクトルさえ、前進するためのエネルギーとなる青春期の特有なアンバランスさに生命力を感じた。

本作は、連作短編集で構成されており、生徒たちの視点で物語が進んでいく。

登場人物たちの三年後を描いた続編「終わらない歌」もぜひお勧めしたい。